

希望を持って平和に生きつづける こと、を考える



一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 **安家 周一**

人間にとって、どんな時でも、どんな環境の中でも希望を持って平和に生きることができればそれは「幸せ」なのだと思います。そのような生き方を追求できる人間に育つにはどうすればいいのでしょうか。この答えは、幼少期の育ちに関わる大人との関係や生活、遊びの環境にコツがありそうです。

心理学では人間の習性について次のように説明されます。人間は

- 1/ 模倣と創造性（人まねとウソつき）
- 2/ 異質性を排除する（同質を求める）
- 3/ 共感性が欠如している（共感性は生得的ではない）
- 4/ 秘密の宝箱を持っている（人には言えない内緒のことがある）

とされています。この習性から、周囲の人たちによる養護的関わり、環境との関係や人との交流によって徐々に良き市民になるよう社会化していくのでしょうか。その育ちの中で、自分のことだけではなく人と共存することや、他の人が喜ぶように配慮することで生きることの喜びになることを感じられるのでしょうか。毎日子どもが繰り広げる園生活を見ていると、この学びの要素が満載です。

私たちの意欲や希望を持って生きる能動性は、前頭前野と呼ばれる額の内側にある脳の部位が担っているといわれています。脳の育ちで、聴覚、視覚野の臨界期は6～7歳前後なのに対して前頭前野はゆっくり発達し、25歳くらいで成熟期を迎えます。それまでは、なかなか理性的な振り舞いや相手と折り合いをつけることは難しいこともあるでしょう。自分自身の思春期を考えても分かります。

そんな特性を持つ前頭前野ですが、その部位が十分に育つためには小さいころから主体的に能動的に様々な遊びを楽しみ、仲間と豊かな関わりをすることによって前頭前野にドーパミンという物質が大量に分泌され、脳の育ちが促進されるのだそうです。ですから幼児期の子どもの毎日は、まさに「楽しくってしょうがない！」と思える環境で、「自己」と「他者」による社会的相互作用の有機的な繰り返しがなければならないこととなります。

そのような意味からも、保育者の役割は、知識や技能の習得を目的にするのではなく、心が揺さぶられる環境

の構成（心情の揺さぶり）であり、やってみたい、使いたい、遊びたいというやる気（意欲）がわき、遊びに向かう中で、仲間との葛藤や喧嘩が発生することもあります。そのような経験から、どのようにふるまえば楽しい時間が長続きするのかを模索し、ルールを守って楽しむ（態度の形成）賢さを獲得します。5歳児に見られる自分たちの遊びを俯瞰して感じられる知恵付きでもあります。

このような幼少期の充実した学びをもって小学校に進み、学習を狭い意味でとらえるのではなく、生活の中で社会全体の事象や興味などと広く結び付けながら学んでほしいと願います。これがプロジェクト型学習・アクティブラーニングと呼ばれている学習方法です。その様な学びを経て、生活や社会に能動的にかかわり、主体的に自分の生きる社会が良くなるようにしようと考えられる人に育ちあがっていくのでしょうか。

残念ながら、一国のリーダーの共感性が欠如していれば、他国に軍事力をもって侵略することも、両国の若者が戦争で大量に亡くなることは避けられないわけであって、到底理解されることはありません。歴史に汚点を残すこととなります。

参考文献

明和政子（2019）「ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで」、筑摩書房